

主体の解釈学

1982 年 1 月 6 日の講義（第二時限） pp.33-50
（2025 年度）

K 原

<今回（2 時限目）>

- ◆ 『アルキピアデス』を読み始める回。もともと、認識する主体によってのみ真理に到達する原理と、主体自らを変形させるような実践（＝霊性）は、もともとはひとつだった（＝自己への配慮）。ソクラテスの言っている自己への配慮は、認識するだけではだめで、自らに対する変形が必要だった。しかしその後、神学によってその関係性にくさびが打ち込まれ、乖離・分離していく。
- ◆ この乖離・分離は、しかしデカルトの契機によって「決定的に断ち切られ」たわけではない。何度かむすびつきを断ち切られた契機があるということのようだが、自己への配慮（＝霊性）について、（結局いくつかの契機があるのか不明だが）3 つの契機が示され（1. ソクラテス・プラトンの契機（自己への配慮の登場）、2. 自己自身への配慮の黄金時代（紀元後最初の 2 世紀）、3. 異教的・哲学的修練からキリスト教的禁欲（＝修練）主義への移行（4-5 世紀））、今回の第二時限ではそのうちのソクラテス・プラトンの契機が詳細に取り上げられていた。
- ◆ このソクラテス・プラトンの契機は、自己への配慮（霊性）の登場であり、ごく初期は自己への配慮は若者がその師とのあいだに、あるいは愛人との間に、あるいは師かつ愛人であるような人との間に結び結ばれる関係における活動であり、若者の成長のための契機であり、『アルキピアデス』にみられる自己への配慮は、身分上の優位を政治（＝他者の統治）へと移行するのに必要な条件とされていた。その後、自己への配慮は、あらゆる個人の生涯を通じての恒常的義務になっていく（『ソクラテスの弁明』にみられる自己への配慮）。つまり…ソクラテス・プラトンの契機とは、自己への配慮は若者の成長のための契機であり一時的・限定的なものから、すべての人の恒常的義務へと変わっていった、ということか？
- ◆ この自己への配慮の登場（＝ソクラテス・プラトンの契機）において、2 つの問題が出てきている。
 - 1 つめの問題：自己への配慮の自己（つまり、主体と呼ぼうとしているもの）とはなにか？
 - 2 つめの問題：自己への配慮に向き合い、真剣に取り組んだらどうなるのか？

霊性の諸要請がひきおこした摩擦。デカルト以前の科学と神学。古典哲学と近代哲学。マルクス主義と精神分析
(pp.33-8)

- 今回も引き続き古代ギリシアに関する内容になっている。この当時は、自己への配慮、つまり、認識する主体と、主体自らを変形させる実践（＝霊性）の 2 つが真理への到達に必要なものだった。しかし、のちにこの 2 つの関係性は、神学によって乖離・分離されていく（これにより「認識する」主体が基礎づけられる）。なお、霊性と科学の間には構造的な対立はない：「主体の存在における深い変化なくして知はあり得ない」。
- その乖離・分離というのは、決定的に生じたものではない。デカルトの契機において断絶が決定的に生じたと考えるべきではなく、むしろすっぱりと分断が生じなかったと言える：
 - 例）スピノザ（17C）の知性改善論：真理への到達の問題は主体の存在そのものにかかわる一連の要請と結び付けられていた（＝主体の変容、つまり霊性と結びついていた）。カント（18C）以降：まだ霊性は消えていない。デカルト哲学・17 世紀の哲学以来：ひとが霊性の構造から引き離そうとしていた哲学を同じ構造の中で再考するようになった。19 世紀の哲学：まだ結びついて入る。再び自己への配慮へ配慮するようになっている（主体の存在そのものの変容が認識と結びついていた）。→この全部、霊性は消えてはいない
- 偽科学、本当の知とは言えない、として紹介されているマルクス主義や精神分析といった知の形式にも、霊性（＝自己への配慮）の要素の一部が認められる。偽科学は真理に到達するために主体の転換を要求したりするからすぐわかる

- 主体の存在のなんたるかという問題と、真理に到達することで主体において変化しうるものは何かという2つの問題は靈性に特徴的で、いずれの知の核心部分にも見出すことができる（言い過ぎなら出発点・到達点に見出せるとのこと）。これらの知の形式において見出される問題、問いかけ、要請といったものが、自己への配慮、真理への到達の条件としての靈性という、何よりも古くなによりも根本的な問題であるように思われる。あとラカンの話をしていた（略）。認識（精神分析）において、主体の真理は靈性（＝自己への配慮）の視点からは問題を提起できない。
- ひとはこれらの知の形式に固有の靈性のそうしたさまざまな条件を社会的形式の内部（＝個人に外在的な条件？）に隠そうとしてきた。階級、党派、グループ、学派、通過儀礼、分析家の養成などを真理の到達に必要な主体の構成条件とされてきた→マルクス主義や精神分析は、その一例ということか。真理と主体という問題を帰属の問題に切り下げるには真理と主体のあいだの関係の問題の忘却という犠牲を払わなければならなかった

自己への配慮に関する3つの契機

- 1) ソクラテス・プラトンの契機（「自己への配慮」の登場）
- 2) 自己の陶冶、自己自身への配慮の黄金時代（紀元後の最初の2世紀）
- 3) 異教的・哲学的修練からキリスト教的禁欲（＝修練）主義への移行（4-5世紀）

*この1月6日・第二時限の講義では、1)のソクラテス・プラトンの契機が詳細に説明されていく（途中？）。

1) ソクラテス・プラトンの契機（「自己への配慮」の登場）（pp.38-48）

スパルタの格言。身分と結びついた特権としての自己への配慮（pp.38-40）

- 「自己へ専心しなくてはならない」はソクラテスが言い出したのではなく、もともとスパルタの格言で、その時点では、自己への配慮は身分的特権だった。

なんで農奴に土地を耕させ、自分たちではやらないの？と聞かれ、スパルタの人は「なに、自己に専念するためですよ」と答えている。

プラトンの『アルキビアデス』の最初の分析（pp.40-2）

プラトン著『アルキビアデス』により、自己への配慮の登場に関する説明がなされていく。

- アルキビアデスって誰：ソクラテスの愛弟子のアテネに生きた少年？（青年？男性）。のちにアテネを統治するが、失敗してアテネが破滅する。美しすぎて愛人がたくさんいた。同時に傲慢で、それにより愛人をはねつけてきた。その間に、彼は愛の対象にならない境界年齢に達してしまった。ソクラテスは、神の声を聞いたただ1人アルキビアデスを追いかけて続いていた。アルキビアデスは自分の美しさに甘んじることはできず、彼の特権的な身分、身分上の優位を政治的行動へ、他者の実際の統治へと転じようとする。その瞬間、ソクラテスは自己への配慮を政治への移行の条件として説く。アルキビアデスは、無知な奴隷によって教育を受けた（＝教育を受けていない）。
- ソクラテスって誰：ギリシアの最初の哲学者。「無知の知」でよく知られている。第一時限で見たように、裁判にかけられ、弁明を行う。死刑が宣告されるが、とあるきっかけで死刑が1ヶ月延びる。最後は毒杯を飲み亡くなる。アルキビアデスとは師と弟子の関係。
- （参考）カルミデスって誰：アルキビアデスより少し年上の若者。カルミデスは『アルキビアデス』ではなく、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』に登場する人物。すでに政治に参加しており、評議会に参加して意見を述べたりしている。しかし、彼は内気で、公の発言をする勇気を持てずにいた。ソクラテスはいいいから自分のことに少し注意を向けてみなさい。自分自身に気をつけて、自分の美点に気づきなさい。そうすれば、政治生活に入ることができるでしょう、と伝える。カルミデスへのソクラテスの励ましには、「気を付ける」という表現が用いられている。→アルキビアデスより年上で、すでに政治参加しているが、自己への配慮言われている

<ソクラテス周辺の時系列>

アルキビアデスの政治的要求とソクラテスの介入 (pp.42-5)

- *2 種類の敵：内部の敵（都市の中で出会う）と、都市にとっての敵（＝外部にいる都市の敵）のこと。ここでは、例えばスパルタやペルシャが外部の敵として言及されているが、ペルシャに関しては割と遅い時期から興味が見られるとのこと。

*実際にソクラテスは、アルキビアデスにはテクネーがないことを長い一連の問いかけから示す。その問いかけから、アルキビアデスは、都市がうまく統治されているのは、市民のあいだに親愛（コンコルド）が成立しているときだという定義に辿り着く。しかし、その親愛とはなんなのかという問いには答えられない。そして、アルキビアデスは自分の無知を恥じる。その後、ソクラテスはアルキビアデスに言う。「心配するな。自分の恥ずべき無知に気づき、自分が何をいっているのかすらわからないと気づいたのが五十歳だったとすれば、それをなんとかするのは大変難しいだろう。というのも君は、自分の世話をするのが大変難しいだろうからだ。しかし「君の年齢は、まさにそのことを覚るべき、ちょうどいい年齢なのだ」→ソクラテスの弁明中の話と違う

- ③ 『ソクラテスの弁明』：自己への配慮はあらゆる人が対象、生存にかかわる恒常的義務とまとめられる？

- 2) 自己へ配慮する必要が、アルキピアデスの教育の不十分さと結びついていること：ということは、アテネの教育が不十分だったということになるが、この不十分さには2つの側面がある。
1. アルキピアデスの教育（師）が、無知な奴隷だったこと。政治の道に進もうという若い貴族を身近な家族の奴隷に委ねるのは適切ではない。
 2. 少年への愛（エロス）が、アルキピアデスにたいして、それが果たすべき役割を果たしていないこと。彼の体目当ての男たちは、彼が自己へ配慮するように促そうとしない男たちだった。彼らはアルキピアデス自身に興味を持っていたわけではなかった。なぜそう言えるのかというと、もしもそうならアルキピアデスに自己へ配慮するよう促すからだ、ということのようだ。だから、アルキピアデスが若さを失うと、彼らはアルキピアデスを見捨てた。→このエピソードから言えるのは、自己への配慮の必要は、政治的な企図だけではなく、教育上の欠陥のうちに書き込まれているということ。（＝教育が足りない、だから自己へ配慮しなければならない？）
- 3) 教育者の手を離れ、政治的活動の時期に入ろうとする境界年齢のときこそ、自己へ配慮するすべを学ばなくてはならないこと。
- これは「ソクラテスの弁明」とは矛盾している。ソクラテスの弁明では、ソクラテスの仕事は「神々によって私に委ねられたもので、町中に立ち、老いも若きも、市民もそうでない者も、みんなを呼び止めて自己へ配慮するように言う」というものであった。ここでの自己への配慮は、あらゆる生存エグジスタンスにとって一般的な機能としてあらわれている。→自己への配慮は、誰にとってもその生存にかかわる機能になっている。
- 一方『アルキピアデス』では、若者の成長において必要な契機としてあらわれている。→自己への配慮は、あらゆる人が対象というわけではなく、生存のための恒常的義務でもなく、若者の成長のための契機になっている。よくわからないけど、アルキピアデスのような若者の成長のための契機ではなく、あらゆる個人の、生涯を通じての恒常的な義務となったとき、自己への配慮の大きな論争点のひとつ、大変化の生ずる点のひとつとなるでしょう、ということは、アルキピアデスのほうが先で、ソクラテスの弁明の方が前、という想定になるという理解で正しいか？→正しいみたい。『アルキピアデス』においては、自己への配慮は若者がその師とのあいだに、あるいは愛人との間に、あるいは師であり愛人でもあるようなひとたちのあいだにとりむすぶ関係だった。（ソクラテス・プラトンの契機は、その大変化が生ずる点ってこと？あと、急にアリストテレス（神学の祖）出てくるけど何？）
- 4) 自己への配慮の必要が急に突然現れるのは、アルキピアデスが政治に関わる企図を口にしたときではなく、彼が自分の無知に気づくときだった。彼が知らなかったのは、彼が配慮すべき対象のもの、その性質。自分が国務につきたいと思っていることは知っていた。彼は自分の身分がそれをする十分な理由になると思っていた。しかし、それをどうやったらよいのかはわからなかった。自分の政治的活動の、目標であり目的でもあるようなものが何なのかわからなかった。だから彼は、自分自身に配慮しなくてはならない。

自己のはっきりしない性質と、その政治的な含意 (pp.47-8)

2つの問題がある：

- 1) 自己へ配慮しなくてはならない、というときに配慮すべき自己ってなんなの？（この「自己」とは「個人」とか「人間」のことではない）
「アルキピアデス」の対話篇のテキストの最後の部分の展開、ソクラテスが問い、答えようとしている問題とは「君は君自身に配慮しなくてはならない。さてきみは人間だ。つまり問題は人間とは何かということだ」といったものではない（＝これは人間という「個人」についての問い）。問題は、「きみは君自身に配慮しなくてはならない。しかしこの自己（auto to auto）とはいったいなんだろうか。というのもきみが配慮しなくてはならないのは、きみ自身なのだから」ということ。この問題は、私たちが主体の問題と呼ぼうとしているものに関わる。個人から発して自己にめぐりきたる、この反照＝反省的な活動、この反照＝熟慮された活

動が向かう、この点とはいったい何だろうか。この自己とは何だろうか。

2) ちゃんと自己へ配慮した結果ってどうなるの？

自己への配慮が適切に展開され真剣に受け止められたときに、アルキビアデスを、他者を統治しようとする
さいに必要としている技術（テクネー）へと導くのか？

- この対話篇の論点は、統治しなくてはならない他者に適切に配慮することができるために私が配慮しなくては
ならないこの自己とは何かということ。

（わからなかった）波線部の、個人と主体の違い（第一時限でも出てきていたが、きちんと追えていなかった）

→追記：前回の講読会で英訳版を参照、「個人から発して自己にめぐり来る」の部分は、"this reflective activity
which turns the individual back to himself"で、どうやら「自己」も「個人」も人間存在（man）そのものについ
て語っているのではなく、一般的な意味ではなく、きわめて個人的な自分のこと、まさにその人自身、自分自身の
ことであると確認した。

（わからなかった）結局、ソクラテス・プラトンの契機って何？？（ソクラテスの話たくさん出てくるし矛盾して
るから…次回？）

*教育と愛（少年愛？）があれば自己への配慮は必要ない（十分自己に配慮している）ということになるのか？こ
こで言っている教育・愛とは？自己への配慮との関係性は？（次回？）